
特別寄稿

私を運命付けた出会い

川崎医科大学 微生物学教室

松 本 明

(平成12年2月23日受理)

The Encounter with Persons who Decided the Course of My Life

Akira MATSUMOTO

Department of Microbiology,

Kawasaki Medical School,

Kurashiki, Okayama, 701-0912, Japan

(Received on February 23, 2000)

現在: 岡山大学医学部泌尿器科学教室 特別研究員

Present address: Special Research Fellow,

Department of Urology,

Okayama University Medical School,

Okayama, 700-8558, Japan

昭和37年3月, 九州大学理学部生物学科の大学院を修了した私は1年間の期限付き助手として九州大学医学部癌研究施設(現生体防御研究所)病理部 故今井環教授の元に赴任し, C₃Hマウスの乳癌ウイルスの電子顕微鏡的研究に従事することになった。その結果, 大学院時代の動物発生学から微生物学への転向を余儀なくされた。「余儀なくされた」と敢えて述べたのは当時の理学部生物学科出身者の厳しい就職難があったからである。翌昭和38年4月に大学院時代の恩師川上泉教授のお世話で京都大学ウイルス研究所 故東昇教授の元に助手として移籍した。この機会が当時PLT群ウイルスとして取り扱われていたクラミジアとの出会いであった。比較ウイルス学的観点からクラミジアを研究中であった東昇先生の元には, すでに現新潟医科大学教授多村憲先生が極めて精力的にクラミジア研究を進めておられ, 数々の優れた業績を挙げておられた。以来30余年多村先生の実質的な御指導を受けながら, クラミジアは私の主要な研究対象となったが, 当初から多村先生の生化学的研究に, 私の主として電子顕微鏡による形態学が沿う形で研究が進められたように思う。京大在籍中の昭和42年秋から2年2ヶ月に亘り米国ノースカロライナ大学医学部 G.P. Manire 教授の元でクラミジア研究に従事したことも私の研究に大きく影響し, 昭和53年, 東昇先生の元に再び戻る形で川崎医科大学に赴任した後も同じテーマを続けることができた。赴任後数年間はそれまでの研究の継続であったが, 程なく当

時呼吸器内科, 現川崎医療福祉大学副島林造教授を通じてオウム病患者の血清診断と, 患者が飼育したセキセイインコからのクラミジアの分離や, 分離株の性状解析に携わることになった。これを機にその後はオウム病に限らずクラミジア感染症, 就中 *C.trachomatis* による性感染症や *C.pneumoniae* による呼吸器感染症に関連する研究へと対象が広がった。セキセイインコからの分離株は Izawa-1 株として現在, 国内に普及している。

平成10年夏, カリフォルニアで開催された第9回ヒトクラミジア感染症に関する国際シンポジウムに出席した機会をとらえ, ノースカロライナに30年ぶりに戻った。ここで Manire 教授の後任として現在クラミジア研究で活躍中の P.B.Wyrick 教授 (私の留学当時, ブドウ球菌 L form を研究していた大学院生。私が電子顕微鏡を手ほどきした) 主催の特別セミナーで, Manire 教授 (クラミジア研究の歴史に名を連ねる Meyer の弟子) をはじめ多くの研究者を前に New advancement in the biology of Chlamydia と題する講演の機会を得たことは私にとって筆舌に尽くし難い喜びであった。一方, これに先立つ国際シンポジウムでは私の発表に対する反響と共に, これまで論文にした私の電子顕微鏡写真が頻々引用されたことにも少なからず驚かされた。このシンポジウムへの出席は1年前から J.Schachter 教授に誘われていたものである。彼も Manire 教授同様 Meyer 門下で, その縁で1970年秋, 当時の著名なクラミジア研究者であるカリフォルニア大学 Thygeson 教授の研究室で講演の機会を得て以来の友人となった。平成2年(1990), 大阪での第15回国際微生物学会議 (IUMS Congress: Bacteriology and Mycology - Osaka) のクラミジアシンポジウムのコンビナーに指名され, Schachter と共にカリフォルニア大学 R.S.Stephens, ウプサラ大学 P.-A.Mårdh を交えたシンポジウムの機会を得た。東, 多村両先生, 副島先生それに Thygeson をはじめ Manire, Schachter, Stephens, Mårdh, Wyrick, そして1988年クラミジア形態の総説執筆を奨めてくれた A.L. Barron, 1999年クラミジアの総説を共著した D.Rockey らの人的流れの中に身を置く機会に恵まれ, 今日に至った幸運を今更ながら実感している。